

「官僚は無知蒙昧な有象無象と考えている。有象無象の国民に選ばれた国会議員は無知蒙昧のエキスに過ぎないと見下している。国家を支配するのは国家公務員試験や司法試験などの難しい国家試験に合格した偏差値エリートであるべきと信じている。これらの国家試験で測ることができているのが、教科書の内容を記憶し、一定時間内に筆記試験で再現する人間の能力の一部分に過ぎないことが理解できない、本質的に愚かな官僚が多いのである」(要約)

佐藤優氏による『週刊金曜日』(二〇一〇年六月十一日/第八〇二号)への寄稿「菅直人政権は外務官僚に包囲された状態で発足した」からいささか長く引用した。この論考は教育が主題ではないが、引用部分は日本の学校が社会に送り出している「偏差値エリート」の本質を言い当てている。北海道を一国に見立てれば、道庁が霞が関に当たる。道庁幹部にも同じ臭いを感じることもある。彼らは道議会議員を「センセイ」と呼んで表向きはペコペコしているが、腹の底では議員を侮蔑している。

霞が関のミニチュア版である天下りの構図を正当化する論理も似ている。某有名国立大学を出て道職員になったA氏は部長職で退職後、関与団体へ天下りした。霞が関に出向経験もある彼によると、霞が関の官僚は国民の知らないところで大変な長時間労働をこなしている。しかも、「安月給」で。だから、安月給で損した分を退職後の天下りを取り返すのは当然の権利なのだと言う。自分にもあてはめたいのだろう。

◇ ◇

偏差値エリートが生み出す北海道の人材難

偏差値エリートは同類の偏差値エリートを好む。道は昨年度、雇用対策として三〇〜四〇歳を対象にした特別採用試験(中級職)を実施した。採用予定は約四〇人。一五六六人が申し込み、一一七九人が受験した。これを筆記の第一次試験で一三五五人に絞り込み、面接試験を実施した。ところが、道職員の適性があると判断できる人材があまりに乏しかった。土下座して採用を懇願し、試験官をあ然とさせた受験者もいたらしい。最終的な合格者は二六人とどまり、採用枠を一四人も余してしまった。

筆記試験は採点に手間のかかる論文ではなく択一式。ここでふるいにかけてられた一〇〇人以上の志願者に輝ける人材が埋もれていた可能性がある。しかし、偏差値エリート集団の道庁はそういう発想にならない。自分たちもくぐり抜けてきた同じ関門を突破する能力を持たない人間を、たとえどんなに個性豊かで北海道に対する熱い志があっても、真の「人材」とは認めない。このような思考形式こそ、「正解は一つ」の日本型教育が生み出した病理である。

高所得者ではない自営業の友人がこんなことを言った。「努力していない人間に福祉の恩恵を与える必要はない」。彼の発想は努力を「している」「していない」で人間を二分類できるという前提に立っている。彼は自分自身を「努力している人間」に無意識に分類する。しかし、もっと努力している人からみれば、彼も「努力していない人間」に仕分けされるかもしれない。社会的に恵まれない層の人々がもっと底辺にいる人々に対してみせる敵意には、択一式発

想に慣らされた心性をみてしまう。このような人々は抵抗のエネルギーを権力者には決して向けない。なぜ自分が恵まれていないかを深く考えないからだ。

◇ ◇

参院選。争点は消費税だという。あらゆる選挙で教育が主たる争点になったためがない。しかし、日本が直面しているさまざまな課題は、時代の変化に柔軟に対応できない政治、行政、企業の硬直に真の原因がある。自分で考えず、自分の意見を持たないことをよしとしてきた適応重視の教育が深刻な制度疲労を起こしている。

北欧では地方自治体が教育に大きな裁量権を持ち、地域の実情に合わせた教育がなされている。これを参考にすれば、北海道では例えば、農業を守ることに自覚的な消費者を育てるために食の安全、フェアトレード、スローフード、地産地消といったテーマを学校で積極的に取り上げなければならぬ。学習指導要領に基づく画一的なカリキュラムがそれを妨げるのであれば、文部科学省と闘うことが知事や道教委の本来的な仕事だ。

北教組の活動を調査すると称して道教委は大量のアンケート書類を学校に送りつけた。その集計と分析に膨大な労力を費やして道教委職員は仕事をした気分になっただことだろう。本来の教育行政に求められるものは何か。考える力を持たない行政官僚は、考える力を持った人材を見抜くこともできない。かくして、教育に端を発した人材難が再生産されていくのだ。

△希▽